

帽子の買い手

人 物

春口 玲（20） 大学 2 年生。

加藤 洋（20） 大学 2 年生。

相良 将（20） 大学 2 年生。

松田 大勢（20） 大学 2 年生。

店員 A（19） 居酒屋「おかえ倫」の店員。

狭山 愛 春口の電話相手。声のみ。

○高知県高知市・はりまや橋商店街（夜）

はりまや橋商店街は多くの人で賑わっている。

子連れの家族、若いカップルなど幅広い年齢層の人々が楽しんでいる様子。通りの真ん中には大きなクリスマスツリーが設置されており、皆携帯を片手に写真に収めている。

○同・居酒屋「おかえ倫」・店内（夜）

沢山の日本酒、焼酎がカウンターに置かれている。

店内は大盛況であり、騒がしい様子。座敷席には春口玲（20）、加藤洋（20）、相良将（20）、松田大勢（20）が酩酊状態にいる。

加藤「見て見て、これ」

加藤が自身の携帯を春口らに見せる。

春口「どれどれ？おー」

松田「おい、俺にも見せろや」

春口らはもみくちやになりながら、加藤の携帯を覗き込む。

松田「え！めっちゃ可愛いじゃん」

加藤「でしょ？」

松田「まじ！いつ？どこで？何を？え？」

加藤「へっへっへ」

加藤は照れ臭そうに次々と画面をスクロールする。

店員△「お待たせしました、鰹のタタキの人前です」

店員△(19)が大皿に盛られたカツオのたたきを持ってきた。

松田「さっきのもう一回見せて」

加藤「どの写真？」

松田「さっきの2個前くらいのやつ」

加藤、相良、松田らはスマホに気を取られており、店員の存在に気づいていない。

一方、春口は加藤のスマホを見ながらも店員の存在に気づき、加藤らの様子

を伺っている。

加藤「おい、俺ばつかずるいぞ、相良のも見
せろ、知ってんだぞ」

相良「俺に飛び火くんなよ。ったく、ちよつ
と待てろ」

松田「まって、じゃー俺も見せる」

加藤ら三人は未だ店員に気づいていな
い様子。

春口は痺れを切らし、戸惑っている店
員△から手渡しで大皿を受け取る。

店員▽「(小声で)ありがとうございます」

春口はコクリと頷く。

×××××

松田「だめ、もうパンパン」

机にうずくまる松田。

鯉のタタキは、切れしか食べられ
ていない。

加藤「誰だよ、これ頼んだやつ、センスねー
だろ」

相良「春口だろ？」

春口「俺？みんなに確認したやん」

加藤、相良、松田は先ほどまでと一変して落ち着き、苦しそうな様子。

春口「ちなみに俺まだ食えるけど、全部食べちゃっていいの？」

加藤・相良・松田「どうぞ」

春口「なんやねん」

春口は小声で呟きながら、鯉のタタキを頬張る。

○同・居酒屋「おかえ倫」・外（夜）

おかえ倫と書かれた暖簾をくぐる春口ら。

店員「ありがとうございます」

○高知県高知市・はりまや橋商店街（夜）

はりまや橋商店街の通りを横並びで歩く春口ら。

加藤「プレゼント何にすんの？」

相良「俺？俺はネックレスかな、そんな高くないけど」

加藤「ええやん。パールックにしたら？」

相良「えーいいんかな？重くない？」

松田「それがええやん。プレゼントの重さでもう逃さないっているアピールをするんや
って」

加藤「それありやな、俺もやろうかな」

松田「やろう！ちなみに俺は帽子のパールック」

加藤「帽子かー。なんか手抜き感ない？」

松田「あれやから、彼女も帽子好きやから」

加藤「なるほどね、ならええか」

相良「春口は？彼女に何あげんの？」

春口「俺？そうだな…」

加藤、相良、松田は春口の顔に視線を
向ける。

春口「俺もパールックの帽子かな、彼女も帽子
好きだし」

松田「え？彼女帽子好きだったけ？ジュエリ
ー系好きじゃなかったけ？」

春口「ん？あー、最近ハマっているらしいん
だよ、帽子に」

加藤「春口の彼女って今どこにいの？」

春口「四万十」

加藤「県内ではあるだ。へーいいじゃん、ク
リスマス一緒に過ごすの？」

春口「いやー、彼女バイトらしくて、だから
会えないんだよね」

相良「クリスマスにバイトとか、春口と会い
たくない口実なんじゃないの？」

春口「いやー、どうだろうね。そうでないこ
とを願うばかりだけど」

松田「え、じゃーさ、その帽子も彼女チヨイ
ス？」

春口「これ？」

春口は黒色のバケットハットを被って
いる。

頭上に視線を向ける春口。

春口「…そうね、誕生日にもらった」

松田「いいなーそれ高いやつじゃん、大事に
しなね？」

加藤「誰目線だよ」

松田「どうも、高知の藤原ヒロシです」

相良「誰だよ」

松田「知らないのかよ！お前あの藤原ヒロシ
を」

相良「何？野原ひろし？」

松田「ちげーよ、藤原」

相良「野原？」

松田「藤原！」

相良「わかんねーよ」

松田「何がだよ」

春口は一連の流れを不適な笑みをしな
がら見守る。

○コーポひろめ 405 室・春口家・玄関

（夜）

真っ暗な部屋。

春口が入室し、電気をつける。

鍵を下駄箱の上に放り投げ、靴を乱雑に脱ぐ。

○コーポひろめ405室・春口家・リビング

（夜）

リビングへと入室した春口。

入室するとすぐに、帽子をベッドに放り投げる。

ソファに座る春口。

少しイライラした表情を見せており、貧乏ゆすりもしている。

その後、すぐにソファから立ち上がる。

×××××

リビングの机には空き缶が3本置かれている。

春口は酩酊しながら、誰かに通話を掛けている。

愛の声「もしもし」

春口「あ、お疲れ」

愛の声「お疲れ」

春口「今さっき行ってきたよ、飲み会」

春口は缶ビールに口をつけながら、会話をする。

愛の声「こないだ言っていたやつ？」

春口「そう」

春口は何も語り始めず、数秒間沈黙が続く。

愛の声「……そう。どうだった？」

春口は下唇を噛み、遠くを眺める。

春口「やっぱ俺おかしいらしいわ、乗り切れてないわ」

大声で答える春口。

愛の声「……」

春口「みんなそうだよ。大学生になった途端、急に知らない世界で生きだすんだよ。これまでそんな素振りも見せなかったくせに」

缶ビールを飲みながら、口調が荒くな

る春口。

春口「いつから？いつから皆そんな俗に言う大人になり始めたの？俺は何？俺だけまだなんだよ、その大人とやらのなり方を知らないのは」

愛の声「……辛かったね」

春口「…辛い？辛かねーよ。本来あるべき姿について言及しているだけだよ。…強いて言うなら、∞万の帽子を実費で買ったことくらいだよ、最近の辛いことは」

帽子を見つめる春口。

春口「…ごめん、一週間前に斉藤さんで出会った見知らぬ男の愚痴を聞いてもらって」
愛の声「うんうん、そう言う場だから、斉藤さんは」

溢れ出そうな涙を堪えるべく天井を向く春口。

春口「…なんかね、辛くはないんだけど、悲しいんだよね」

(了)

